

— 万葉集人物伝研究 (三) —

大伴旅人の近侍者のひとりであり、旅人・家持にすくなからずも文学的交渉のあった「資人、余（あるいは「金」）明軍」についての伝記を明らかにしてみようとするのが小稿の目的である。

万葉集中に「明軍」は次のように見えている。

卷三、譬喩詞の部に、

余明軍歌一首
しめゆひて
印結而 我定義之
わがきだめてし
住吉乃
すみのえの
浜乃小松者
はまのこまつは
後毛吾松
のちもわがまつ

同卷、挽詞の部に、

愛八師はちし 榮之君さかえきみ乃伊座勢婆いましせば 昨日毛きのふも今日毛けふも 吾乎わを召麻之乎めきましを

如^{かくの}是^{みに}耳^に 有^{あり}家^{ける}類^{もの}物^を乎^を
芽^は子^ぎ花^{のはな}
咲^さ而^{きて}有^{あり}哉^や跡^と
問^と之^{をし}君^{きみ}波^は母^も

(卷三、四五四)

君きみに恋こひ
痛毛いたも為な便べん奈な美み
蘆鶴あしたすの之の
哭耳なみみ所ところ泣な
朝夕あさゆふ四よ天てん

(卷三、四五)

遠長　つかへむものと
将仕物常　おもへりし
会有之
君不座者　きみいまだれば
心神毛奈思　こころどもなし
（卷三、四五六）

(卷三、四五七)

みどりごの
若子乃
はひたもとほり
匍匐多毛登保里
あまよひに
朝夕
ねのみそわがなく
哭耳曾吾泣
きみなしにして
君無二四天

(卷三、四五八)

右五首、資人余明軍、不_レ勝_二犬馬之慕心中感緒_二作詞。

卷四、相聞の部に、

余明軍与三大伴宿禰家持二歌二首

奉見而
 未時太
 足引乃
 山尔生
 有
 營根乃
 不更者
 如年月
 勲見卷
 所念君
 欲君可
 聞
 (卷四、五七九)

(卷四、五八〇)

の計八首の短歌の作者であり、大納言大伴宿禰旅人卿の資人のひとりとして登場しているのである。

この明軍の伝記は、鹿持雅澄の『万葉集人物伝』に、

金明軍 コンミンヤウグン 金^ノ字、古写一本に余と作り、伝未詳ならず、旅人卿の資人となりけるよし、三ノ巻に見えたり、元暦本、類從抄、古写一本等に、明軍者、大納言卿之資人也、と註せり。

とあって、まったくの伝未詳ではない。万葉研究史の上で、明軍個人に焦点を絞った論考は今のところ私見によれば、市村宏「余明軍考」(昭和37年12月1日、古代文学会にて口頭発表後、昭和39年12月20日)

刊『万葉集新論』に所収)の一篇があるのみである。

従来の研究では、この明軍なる人物が問題にされることはすくなく、雅澄の人物伝にもあるように「金」か「余」かという点がそのポイントであった。従前は、流布本によって「金」が通行していたが、桂本など古写本の発見によって「余」に改められ、古典大系本や沢瀉久孝『万葉集注釈』に「余」としたように、現在の万葉学会では桂本・元暦校本・紀州本などに拠って「余」が普通となった観がある。また、国史学の分野でも、『古代人名辞典』(竹内理三編)の分類によれば「よ之部」は未刊であるが、余明軍の名が「かね・かな」の項にも「きん・こん」の項にも見当らないし、「あぐり」を「よ」の項に一括するという凡例註記があることなどからみれば、この編者たちは「余明軍」とみているものと判断できる。このように現状では「余」が正しいとしなければならぬのである。

ところで、「余」が正しいとして、その余明軍なる人物像はどうなっているのかというと、

大伴旅人の資人(五位以上の官人に賜わるツカヒビト)だった。旅人の没後、挽歌を作り、また家持に贈った歌もある。諸本に余と金と両方見えるが、ともに朝鮮の王族の氏で、明軍は帰化人の系統と思われる。(古典大系本「万葉集」巻四の頭注)

百済王族の出である余氏が、帝徳讚美に用いられる好字「仁明」を二分して、兄に仁軍、弟に明軍と名づけたのではなからうかと思う。(市村宏「余明軍考」)

という二つに集約された形で処理されているようである。問題はここから二つ出てくるはずで、一つは、「余」氏なるものとその氏族における明軍の位置づけであり、二つは、旅人・家持との文学的関係を通しての歌人としての位置づけである。

二 その氏姓名について

余明軍の名は万葉集に三カ所出てくるだけで、他の上代文献には見えないのである。氏の「余」は、「金」か「余」か問題があり、姓はなく、名の「明軍」の表記には異同がない。

(一) 「余」か「金」かについて

まず氏の「余」について、「金」か「余」かの問題を整理しておくことにしよう。

諸本の異同を示せば次のごとくである。

	卷三(三九四題詞)	卷三(四五八左注)	卷四(五七九題詞)
余	類・紀・神・細 ^二 ・無 ^二	古・紀・神・細 ^二 ・無 ^二	桂・元・古・紀・神・京
金	古・西・細・神・無 ^二 ・附	類・西・細・無 ^二 ・附	類・西・細・無 ^二 ・附

つまり、流布本系統のものが「金」となって、古写本系統のものが「余」となっていることが知られる。

また、諸家の説を示せば次のごとくである。

『五代集歌枕』(日本歌学大系本)には、「卷三、三九四」の一首が「金明軍」としてあげられており、金の右に親行本による校合として「余」とあるから、この頃すでに混乱していたことがわかる。

『万葉拾穂抄』には、

金^{カネ}明^{アキ}軍^{イクサ}

とあり、『万葉代匠記』にも「金明軍」とあるが、『万葉考観落集』には、

余^ヨ明^カ軍^{イクサ}歌。一首。今本、余を金に為れり。活本によりて改。

余氏の人、続日本紀に見えたり。

とあって、「余」をとっている。しかし、『万葉集略解』は「金明軍」とし、さらに『万葉集攷証』・『万葉集古義』・『口訳万葉集』・『万葉集新考』（井上通泰）・『万葉集講義』・『万葉集総釈』（吉沢義則・石井庄司）・『万葉集評釈』（金子元臣）・『万葉集私注』などが「金」として
いる。

『万葉考槻落葉』の「余」に従うものは、『万葉集評釈』（窪田空穂）・『万葉集全註釈』・『評釈万葉集』（佐々木信綱）・『古典大系本万葉集』・『万葉集註釈』（沢瀉久孝）であるが、今は古写本に従って「余」を正しいとしたい。

(二) 明軍伝について

次に、すこしくその伝記に関する諸家の見解を紹介しておこう。
先ず、北村季吟『万葉拾穂抄』には、

金明軍 旅人卿の資人也

とあって、「金」氏説で訓みを「カネノアキクサ」とし、旅人の資人として
いる。次に、契沖『万葉代匠記』には、

金明軍 明軍ハ旅人卿ノ資人ナルニ、此二首相聞に入テ志モタ

、ナラス聞ユルニ、此ツ、キニアルハ家持ノワラハナル程ノ事ナルヘシ。第三譬喩歌ニ同シ明軍カ、印結テ我定コシ住吉ノ浜ノ小松トハ、家持ヲ喩ヘケルニヤ

元正紀云。養老五年三月辛未、賜帶人資人四人トアレハ其ノ中ノ一人ナルヘシ

とあって、帶刀資人であろうとしている。また、「卷三、三九四」を「卷四」の二首と同じ時のものとしている。

荒木田久老の『万葉考槻落葉』には、「余」氏とした上で、

古本にも、類聚抄にも資人と有。資人は朝より下さるゝ、つかへ人也。令に見ゆ。

とある。橘千蔭の『万葉集略解』には、

金明軍 聖武紀に金氏を賜ひし事有り、其子孫ならん

とあるが、聖武紀に賜姓金なる記事は見当らない。金氏が他氏姓を賜
ることは見える。（後述）

岸本由豆流の『万葉集攷証』には、「金明軍」として、

父祖、考へがたし。金は氏、明軍は名なり。本集此卷三十一大伴旅人卿薨時歌の左注に、右五首、仕人金明軍不勝大馬之慕心中之感緒作歌とあれば、旅人卿の資人なりし事しらる。書紀、其外にも資人下には、仕人と書るも、資人と書るも、同じ資人の事、下致証三、を、つかひびとと訓下には、庶人よりもなるものよし、古く見えたり。さて、金てふ氏は、姓氏録に見ざれど、続日本紀、大宝三年十月甲戌紀に、僧隆觀還俗、本姓名金財云々。和銅元年正月乙巳紀に、授五位金上元從五位下云々。二年十一月甲寅紀に、金上元為伯耆守云々。神龜元年五月辛未紀に、從六位上金宅良、金元吉、並賜姓國看連云々。天平五年六月丁酉紀に、武藏國埴玉郡新羅人德師等男女五十三人、依請為金姓云々などあるにて、古くより、この氏ありしをしるべし。また、久老は、この金の字を、活本に依て余に改たり。余氏も姓氏録には見えざれど、続日本紀、養老五年正月甲戌紀に、賜正六位上余泰勝絶十足云々。養老七年正月丙子紀に、授正六位上余仁軍從五位下。この余を、古本には金とあり。金氏ならば、この金明軍に似たる名なり。天平勝宝二年六月甲辰紀に、從六位下余益人賜百濟朝臣姓云々などありて、古くよりありし氏なれど、ここを改むるは非なり。

とあり、かなりの金氏・余氏の人物を例にあげて示している。
鹿持雅澄の『万葉集古義』には、

金明軍コンミヤウグンは、旅人卿の資人なること、下にいたりて見ゆ、本居云、新羅ノ国金氏多ければ、彼ノ国人なるべし、奈良の頃までは、西蕃帰化の人もなく、又その子孫なども、いまだ皇朝にて、姓を賜らぬ限は、本国にての姓を用い、名も蕃種の字音の名なるがありしなり、されば此ノ明軍も蕃人歟、又その子歟、たしかにはしりがたし、

とあって、新羅国人系の金氏かとしている。

井上通泰『万葉集新考』には、

金明軍コンミヤウグン 明軍は家持の父旅人卿の資人なり
資人は朝廷より身分に応じて賜はる従士なり。

とあって、その家系は問題にしていない。

山田孝雄『万葉集講義』では、金明軍としているが、「巻三、四五八」の左注において、

これはもと扶余の族なるが故にそれを略したる名と見ゆるが、その百済王の亡国の後帰化したるは持統天皇の朝に百済王といふ氏姓を賜ひたるが、その一族はなほ余氏を唱へしものなり。

とも言っているのは示唆に富んでいる。

金子元臣『万葉集評釈』には、

金明軍 「金」神本に余とある。続紀に余をアグリと訓じた。武智麿伝に、咒禁の人に余仁軍の名が見える。明軍はその一族か。

とあるが、余仁軍との関係については、すでに『攷証』に見え、さらに山田孝雄『万葉集講義』に詳しい。

土屋文明『万葉集私注』には、

金明軍コンミヤウグン 作者金明軍は本により余明軍とある。続日本紀に余仁軍の名がみえ、明軍の関係者らしいが、それも本により金であるといふから、古くから混乱して居たものと見える。金も余も半島帰化の氏族である。

とある。

日本古典大系本には、

余明軍ヨミヤウグン 諸本に余と金と両方見えるが、ともに朝鮮の王族の氏で、明軍は帰化人の系統と思われる。

とある。

沢瀉久孝『万葉集注釈』には、

余明軍 養老七年正月に正六位上より従五位下に叙せられた余仁軍（攷証には、「古本には金ともあり」とあるが）は時も今の作の時代に近く、名も似てをり、今の作者と血族の関係があり、今も余を正しいとすべきかと思はれる。

として、余仁軍との血族関係を支持している。

以上のごとき見解を整理してみると、金か余かいずれにしても、①朝鮮王族の出であること、②余（あるいは金）仁軍とは血族であろうということ、③旅人の資人であったという三点に絞られる。市村宏「余明軍考」では、①について、

金氏は新羅王族の出、余氏は百済王族の出であることが判る。

②について、

仁軍と明軍が全く同時代の人物であることや、この二人の名が仁明という熟語の一字を分けたものと考えられるところから、この二人を兄弟と想定する。

百済王族の出である余氏が、帝徳讚美に用いられる好字「仁明」を二分して、兄に仁軍、弟に明軍と名づけたのではなからうかと思う。

③について、

彼の如きは地位も低く、一生涯を大伴家に仕えた資人で、もとより歌人として著われた人物でもなく、ただ万葉集の編纂に関係のある家持に以上の歌が捧げられたため、家持の歌帖に記録され、その結果として万葉集に入れられたのである。

としている。

ところで、①の朝鮮王族の出であるという点について、古代朝鮮の姓氏についてみると、井上秀雄『古代朝鮮』によれば、

新羅時代は今日の朝鮮と異なり、貴族で血縁関係を主張する姓氏の使用がおくれており、七世紀中葉以降にはじめてあらわれる。しかも貴族が国内支配のために姓氏を用いはじめたのではない。唐や日本への使節となったときに姓氏を用いていることが注目される。このことは新羅王の場合にもいえる。新羅王が金氏を名乗ったのは、『北齊書』の金真興からはじまる。しかし、国内むけの真興王四碑には金氏を示唆するものは何一つ見あたらない。當時はすべての貴族が所屬の部をもっている。そして、その部名は後世の例からすれば、出身地名ないし居住地名である。このよう

な経過から、新羅の貴族社会では血縁觀念より地縁意識が基本になっており、対外関係を通じて血縁觀念が導入されたといえる。

といわれており、別に、金達寿『古代文化と帰化人』によれば、

朝鮮には国姓というものがあつて高句麗のそれは高、百済は余、そして新羅は金なんです。

とあるから、「余」氏のもののは、故国百済の首都扶余の地名をとって自己および自民族の保存を意識して名づけたものと考えられる。

なお、書紀・続紀にみえる外国からの日本への渡来者の様態を概観してみると、大雑把にいつて、西暦四世紀から六世紀までの間は、楽浪郡滅亡による漢民族の移民が多く、次に、高句麗の強大化のために亡国の危機にみまわれた百済からの亡命者が多かった。西暦七世紀以後は、朝鮮半島の新羅統一国家の完成によって、百済と高句麗系の帰化人の数が圧倒的に多く、新羅の帰化人は微々たる数にすぎない。ちなみに、弘仁五年(814)上撰の『新撰姓氏録』によると、当時、五畿内に貫籍をもつ氏は総計一一八〇氏であるが、その中、帰化系氏族は三七三氏を占めているが、その帰化系の内訳は、漢人系一七九、百済人系一一九、高句麗人系四八、新羅人系一七、任那人系一〇で、新羅系は百済系の三割にすぎないことがわかる。そして、この百済人系一一九氏の中、余氏のものを明記したものに、余自信の後とする高野造の一氏がある。こうしてみると「余明軍」を「金明軍」の誤字とみることは出来ないから、百済系氏族の余氏の一員とすることが妥当のようである。

②の仁軍と明軍を兄弟とみる説は別の角度からも賛同したい。(後述)

③の旅人資人説はある一時期にかぎってならば賛同できるが、資人は、すくなくとも本主亡きあととは本省に帰留することになっていたは

ずであるから「一生涯を大伴家に仕えた」とするのは事実と反する。
なお、その資人としての任期が短期間ではあっても、父を喪った傷心の少年の心に大きな影響を与えたであろうことは想像に難くないことである。

三、余氏と明軍について

余明軍の所属する余氏なる人物について古代文献を当たってみると次のごとくである。

まず、古事記には見当たらないが、日本書紀には、

余昌・余怒（余奴）・余豊璋・余善光（禪広）・余宜受・余自進（自信）

の六名が記録されている。

①余昌なる人物については、「百済王子余昌、明王子、威」（欽明紀四年（533）十月二十日条）とあって、『三国史記』には「威徳王、韓昌、聖王之元子也。聖王在位三十二年薨。繼位」（百済威徳王前紀）とあり、「百済王子余昌嗣立。是為威徳王」（欽明紀十八年（538）三月条）とあり、在位四十五年で推古六年（598）に没したとある。余は扶余の略で百済王族の姓である。

②余怒は、敏達紀十二年（584）条によれば、百済国使の正使思率某の部下として来日したことがある。

③余豊璋は、百済義慈王の王子で人質として日本に在ったことが舒明紀三年（631）三月条に見える。在日は天智元年（662）始め頃までであったらしい。『三国史記』百済義慈王二十年条に、また、『新唐書』百済伝に「豊」とある人物で、紀には、孝徳紀・斉明紀に豊璋とあり、皇極二年（643）条には百済太子余豊とある。余は百済王の姓であり、豊は名である。天智称制の年に、太安麻呂の祖父の妹を妻としている（久安五年多神社注進状による）。『旧唐書』百済伝、竜朔元年

（661）条に「扶余豊但主祭而已」とある。天智二年（663）八月二十八日には白村江の敗戦で高麗に逃げている。『三国史記』百済伝に「王扶余豊脱身而走、不知所往、或云奔高句麗」と記している。

④余善光（禪広）は、紀に天智三年（664）三月条から持統七年（693）正月十五までの間の記録があるが、それによれば、百済の義慈王の子か弟のようであり、名を勇ともいったらしい。統紀天平神護二年（766）六月二十八日条によれば、舒明朝に豊璋とともに来日し、百済滅亡のために帰国せず、持統朝に百済王と賜姓、卒して正広参を贈られたとある。持統七年（693）正月十五日頃に没している。百済王とあるのは追記であろう。

⑤余宜受は、斉明元年（655）に百済大使として来日したことが知れるのみである。

⑥余自進（自信）は、斉明紀六年（660）九月五日条に名が見える。天智二年（663）に日本に来たり、同八年（669）に近江蒲生野に「佐平余自信、佐平鬼室集斯等、男女七百余人を以て」遷居した。同十年（671）正月に大綿下を授けられている。なお、『新撰姓氏録』右京諸蕃下に

高野造百済国人佐平余自信之後也

とみえる「高野造」の始祖でもある。ただし高野造姓の人物は正史に記録が見当たらない。

以上の六名の中、④の余善光と⑥の余自信のふたりは日本に土着したことが知られる。そして、④の余善光は百済王姓の族をなし、⑥の余自信は後に高野造姓の族をなしたことがわかる。

次に、続日本紀以後にみえる余氏についてみてみよう。

余真人 余泰勝 余仁軍 余義仁 余足人 余東人 余益人 余民善女 余河成 余福成

など十名を数えることができる。

①余真人は、養老元年（717）正月四日に、

授、從三位阿倍朝臣宿奈麻呂正三位。從四位上安八万王正四位下。无位酒部王。坂合部王。智努王。御原王並從四位下。從五位下高安王。門部王。葛木王並從五位上。從四位下石川朝臣難波麻呂從四位上。正五位上百濟王良虞從四位下。正五位下中臣朝臣人足正五位上。從五位上大伴宿禰宿奈麻呂。穗積朝臣老。多治比真人広成。小野朝臣馬養。紀朝臣男人並正五位下。從五位下賀茂朝臣堅麻呂從五位上。正六位上佐伯宿禰虫麻呂。大藏忌寸「伎」国足。余「真」真人。從六位上朝來直賀湊夜並從五位下。（統紀）

とあるように、正六位上から從五位下に叙されて貴族官僚の最下位に仲間入りしている人物である。

②余泰勝は、養老五年（721）正月二十七日に、

詔曰。至公無私。国士之常風。以忠事君。臣子之恒道焉。当湊各勤所職。退食自公。康哉之歌不遠。隆平之基斯在。災異消上。休徵叶下。宜文武庶僚。自今以去。若有風雨雷震之異。各存極言忠正之志。又詔曰。文人武士。國家所重。医卜方術。古今斯崇。宜擢於百僚之内。優遊學業。堪為師範者。特加賞賜。勸勵後生。因賜明經第一博士從五位上鍛冶造大隅。正六位上越智「麻呂」直広江。各絶廿足。絲廿鈞。布卅端。銀廿口。第二博士正七位上背奈公行文。調忌寸古麻呂。從七位上額田首千足。明法正六位上箭集宿禰虫万呂。從七位下塩屋連吉麻呂。文章從五位上山田史御方。從五位下紀朝臣清人。下毛野朝臣虫麻呂。正六位下樂浪河内各絶十五足。絲十五鈞。布卅端。銀廿口。竿術正六位上山口忌寸田主。正八位上悉斐連三田次。正八位下私

部首石村。陰陽從五位上天津連首。從五位下津守連通。王仲文。角兄麻呂。正六位上余泰勝。志我閑連阿弥施。醫術從五位上吉宜。從五位下具爾胡明。從六位下秦朝元。太羊申許母。解工正六位上惠我宿禰国成。河内忌寸人足。堅部使主石前。正六位下賈受君。正七位下智形朝臣赤麻呂各絶十足。絲十鈞。布廿端。銀廿口。和琴師正七位下文忌寸広田。唱歌師正七位下大窪史五百足。正八位下記多真玉。從六位下螺江臣夜氣女。茨田連刀自女。正七位下置始連志祁志女。各絶六足。絲六鈞。布十端。銀十口。武芸正七位下佐伯宿禰式麻呂。從七位下凡海連興志。板安忌寸犬養。正八位下置始連首麻呂各絶十足。絲十鈞。布廿端。銀廿口。

（統紀）

とあるように、その陰陽の技術を高く評価されて、絶十足、絲十鈞、布廿端、銀廿口を賜っている。

③余仁軍は、余明軍の兄かと推定されている人物であるが、養老七年（723）正月十日に、

天皇御中宮。授從三位多治比真人池守正三位。正四位下阿倍朝臣広庭。正四位下息長王並正四位上。從四位上「六人部王」正四位下。從四位下大石王從四位上。无位栗栖王。三嶋王。春日王並從四位下。正五位下葛木王正五位上。无位志努太王從五位下。從四位上阿倍朝臣首名。石川朝臣石足。百濟王南典並正四位下。正五位上大伴宿禰道足。紀朝臣男人並從四位下。正五位下阿倍朝臣船守。從五位上調連淡海並正五位上。從五位上鴨朝臣堅麻呂正五位下。從五位下引田朝臣真人。路真人麻呂。紀朝臣清人。大伴宿禰祖父麻呂。土師宿禰豊麻呂。津守連並從五位上。正六位上引田朝臣秋庭。河辺朝臣智麻呂。紀朝臣猪養。波多真人足嶋。阿曇宿禰坂持。布勢朝臣国足。息長真人麻呂。角朝臣家主。高橋朝臣嶋主。

平群朝臣豊麻呂。石川朝臣樟。中臣朝臣広見。石川朝臣麻呂。余仁軍。正六位下船連大魚。河内忌寸人足。丸連男事。志我聞連阿弥太。越智直広江。堅部使主石前。高金藏。高志連惠我麻呂並從五位下。又授夫人藤原朝臣宮子從二位。日下女王。広背女王。粟田女王。六人部女王。星河女王。海上女王。智努女王。葛野女王。並從四位下。他田舍人直刀自亮正五位上。太宅朝臣諸姉。薩妙觀並從五位上。大春日朝臣家主從五位下。

とあるように、正六位上から從五位下に叙されて貴族官僚の仲間入りをしている。その職掌は、「家伝下」（藤原武智麻呂伝）に養老・神亀・天平時代の廷臣の名と役とを列記してある中に「咒禁有余仁軍」として名が見えることからすれば咒禁師、あるいは陰陽家であったことが知られる。②の陰陽家余泰勝との時代差二年からみて同族でもあろうか。

④余義仁は、天平十六年（744）十月六日条に、

左大臣家令正六位上余義仁授外從五位下。

とあり、さらに、天平勝宝三年（751）正月二十五日条に、

授正四位上大伴宿禰兄麻呂從三位。從四位上安宿「禰」王正四位下。從四位下大市王從四位上。无位道守王從五位下。正五位上阿倍朝臣虫麻呂。多治比真人國人並從四位下。正五位下佐伯宿禰毛人正五位上。從五位上多治比真人家主。大倭宿禰小東人並正五位下。從五位下高丘連河内。百濟王元忠。大伴宿禰古麻呂。隰大養宿禰古麻呂。中臣朝臣清麻呂並從五位上。外從五位下余義仁。土師宿禰牛勝。正六位上三国真人千国。石川朝臣人成。為奈真人東麻呂。藤原朝臣浜足。正六位下石上朝臣宅嗣並從五位下。正六位上甘味神宝。文忌寸上麻呂。河内忌寸広足並外從五位下。

正三位竹野女王從二位。從三位多芸女王正三位。從五位下置始女王正五位下。无位具原女王從五位下。從五位下佐味朝臣稻敷從五位上。

とあって、左大臣橘諸兄の庇護の下に貴族官僚の仲間入りをしている。余仁軍と近い関係を、「仁軍」「義仁」で類推できる。おそらく仁軍の子供であろう。

⑤余足人は、天平勝宝元年（749）閏五月十一日条に、

陸奥国介從五位下佐伯宿禰全成。鎮守判官從五位下大野朝臣横刀並授從五位上。大掾正六位上余足人。獲金人上総国人文部大麻呂並從五位下。左京人无位朱牟湏亮外從五位下。私度沙弥小田郡人丸子連宮麻呂授法名心宝入師位。治金人左京人戸浄山大初位上。出金山神主小田郡日下部深淵外少初位下。

とあって、大仏鑄造用の黄金を産出した余慶で貴族官僚の仲間入りをしている。さらに、宝龜元年（770）五月十二日条に、

右京大夫從四位下勲四等百濟朝臣足人卒。

とあるのによれば、勝宝元年從五位下昇進後まもなく「百濟朝臣」姓を賜ったのであろう。

⑥余東人と余益人は、天平宝字二年（758）六月四日条に、

大宰陰陽師從六位下余益人。造法華寺判官從六位下余東人等四人賜百濟朝臣姓。

とあって、共に百濟朝臣を賜姓している。おそらくふたりは兄弟であろう。また⑤の余足人はその長兄であろうか。なお、この余氏の百

濟朝臣姓の賜氏姓は、天平十七年(745)九月二十一日付優婆塞貢進解(大日本古文書)にみえる從五位上百濟女王との關係を考慮すべきであろう。百濟女王の父王は不明であるが、母あるいは乳母の氏が百濟氏人であり、余氏であつたのであろう。この東人・益人の近親者(母親か姉妹)であつたろう。「優婆塞貢進解」文によると、近江国高島郡高島里戸主川直鑑の戸口川直吉麻呂を優婆塞として進めたところから、そこが封戸であつたとすれば、齊明紀に見える余自信の流れとの親近關係を推定することができる。また、東人・益人の「人」の字面から、余真人↓余足人・余益人・余東人の血筋を推定したい。なお別に、養老律令の撰定に功績のあつた「百濟人成」(養老六年正月二十七日条・宝字元年十二月九日条)との關係をも考えることができる。人成は真人の弟か。とにかく、ここに余足人・益人・東人・某の四兄弟を始祖とする朝廷との姻戚家格を持つ「百濟朝臣」家が成立したことが知られる。

弘仁五年(814)上撰の『新撰姓氏錄』には、左京諸蕃下、百濟系氏族の一つとして「百濟朝臣」氏が見える。それによれば、

百濟朝臣、百濟國都慕王三十世孫、惠王之後也

とあるが、おそらく余足人らに賜姓のことがあつて以来の家系であろう。後に、承和七年(840)に余河成・福成等三人が、余真人の弟人成の系統であるところから百濟朝臣の賜姓にあづかつたのではあるまいか。

⑦余民善女等は、宝字五年(761)三月十五日条に、

百濟人余民善女等四人賜姓百濟公。

とあつて、余民善女等をふくむ「百濟公」家が成立したことが知られる。しかし、百濟公を称するものにはこれ以前に、天平勝宝二年(750)

二月二十六日付太政官符の宮内省奴婢帳に、正七位下守右少弁百濟公水通の名が見える。この水通は宝龜元年(770)十月二十六日条に、貢瑞の国郡司として賞されて伊予員外正六位上から外從五位下に叙されてゐる。この水通がもと余氏であるかどうか不明であるし、百濟公姓をいつから名乗っているのかも不明であるが、とにかく、百濟公姓の記録の初見はこの水通である。おそらく民善女等は水通系の族人であつたのであろう。なお、これ以後に、景雲元年(767)八月十六日条に「陰陽大屬外從五位下百濟公秋麻呂」の名が見える。この秋麻呂はさらに景雲三年八月十九日条に「外從五位下陰陽允」として名が見える。陰陽師の家系であることが知られる。この②の余泰勝・③の余仁軍との關係を考えることができる。なお、弘仁二年(811)四月二十六日条に「阿波國人百濟部広浜等一百人賜姓百濟公」と見えるし、承和元年(834)正月十二日条に從五位下で参河介となつた百濟公繩繼の名が見えるし、承和六年八月二十九日条に、

改加賀國人正六位上百濟公豐貞本居。貫附左京四條三坊。豐貞之先。百濟國人也。以庚午年(天智九年)被貫河内國大島郡。以乙未年(弘仁六年)被貫加賀國江沼郡也。

と見える。また、承和十三年三月十五日条にも「播磨國揖保郡人散位正八位上百濟公清永。并男一人女一人。改本居貫附左京三條二坊」と見える。

このように、「百濟公」氏が百濟國人の流れであり、おそらく余氏の系統であることは疑いないようである。

⑧余河成・余福成のふたりは、承和七年(840)六月二十二日条に、

備中介外從五位下余河成。右京大屬正六位下余福成等三人。賜姓百濟朝臣。其先百濟國人也。

とみえることからして、ふたりは兄弟であったとみられる。おそらく養老律令撰定の加勞者の百濟人成の血筋であろう。

余河成は、天長十年(833)十一月十八日条に正六位上から外従五位下に叙されており、禄を賜っている。さらに、承和十二年一月七日条に従五位下賜禄、承和十三年二月二十九日条に従五位下安芸守、仁寿三年(853)八月二十四日条に、

散位・従五位下百濟朝臣河成卒。河成。本姓余。後改^{アクリ}百濟。長^{ナガ}於武猛。能引^{ヒキ}強弓。大同三年為^{シテ}左近衛。以^テ善^ニ圖画。屢被^ニ召見。所^レ写古人真。及山水草木等皆如^シ自生。昔在^ニ宮中。令^ニ或人^一喚^ニ從者^一。或人辭以^レ未^レ見^ニ顔容^一。河成即取^ニ一紙^一。図^ニ其形体^一。或人遂驗得。其^ニ枕妙類^一如^レ此。今^ニ之^一言^ニ画者^一。咸取^レ則焉。弘仁十四年拜^ニ美作權少目^一。天長十年授^ニ外従五位下^一。累遷。兼和年中為^ニ備中介^一。次為^ニ播磨介^一。時人榮^レ之。卒時年七十二。

とあるから、延暦元年(782)出生ということになる。百濟人成の孫ぐらゐに当るか。

以上のごとく見てくると、余氏には、天平十七年(745)の百濟女王の出現を境にして、それ以前は「余」か「百濟」であったものが、百濟公・百濟朝臣の二大系統へと再編成されていく過程を認めることができる。別に、余自信の流れをくむ高野造系がある。いずれにしても当面の余明軍は余仁軍との兄弟関係を類推するにとどまるが、泰勝・義仁のふたりは明軍に近い血筋のものかとも思われるが後考を俟つことにしよう。

四、万葉集における明軍

(一) 大伴旅人との関係

「卷三、四五八」の左注に

右五首、資人余明軍、不^レ勝^ニ犬馬之慕心中感緒^一作調

とあり、「卷四、五七九」の割注に

明軍者大納言卿之資人也

とあることからみて、明軍は天平三年秋七月には旅人の資人のひとりであったことは確実である。

「資人」とは、朝廷に仕える舎人の一部を高位高官の私用に供する制度で、養老軍防令の規定によれば、位分資人として、一位に一〇〇人、二位に八〇人、三位に六〇人、正四位に四〇人、従四位に三五人、正五位に二五人、従五位に二〇人、職分資人として、太政大臣に三〇〇人、左右大臣に二〇〇人、大納言に一〇〇人が支給されることになっている。養老三年十二月七日条によれば、位分資人は外六位内外初位及勲七等の子で年廿以上を以て、八年一替として任用することになっていたことが知れる。

この規定に従えば、旅人の資人は次のように支給されたことになる。
〔養老二年の中納言擬正四位上職分資人三〇人
については、慶雲二年四月十七日条による。〕

和銅三年(710)正月	正五位上	位分資人二五人
和銅四年(711)四月	従四位下	位分資人三五人
養老二年(718)三月	中納言擬正四位上	位分資人三五人 職分資人三〇人 計六五人
養老三年(719)正月	中納言正四位下	位分資人四〇人 職分資人三〇人 計七〇人
養老五年(721)正月	中納言従三位	位分資人六〇人 職分資人三〇人 計九〇人
養老五年(721)三月	中納言従三位	位分資人六〇人 職分資人三五人 帶刀資人四人 計九九人
天平二年(730)十月	大納言従三位	位分資人六〇人 職分資人六〇人 帶刀資人四人 計一六四人

天平三年(731)一月 大納言從二位 位分資人八〇人 職分資人
一〇〇人 帶刀資人四人 計一八四人

余明軍が、旅人の資人として近侍していた期間はどれだけであるのか明確にしないが、

遠長く仕へむものと思へりし君いまさねば心神もなし

(卷三、四五七)

見まつりていまだ時だに更らねば年月のごとおもほゆる君

(卷四、五七九)

の二首(前の一首は旅人の死を悼む歌、後の一首は旅人の男家持に与えたもの)から判断するとあまり長い期間ではなかったらしい。位分資人としても、長くとも天平三年にほど近い八年以内のことであろう。神龜五年三月二十八日条に、

勅。補_ニ事業位分資人_一者。依_ニ養老三年十二月七日_一格。更無_ニ改張_一。雖_レ然、資人考選者、廻_テ聽_テ待_テ滿_ニ八考_一始選_ニ賞色_一外位資人十考成選。並任_ニ主情願_一。

とあるのによれば、一定の主人への勤務評定は八年ないし十年間のこととなる。明軍が位分資人ならば、天平三年一月の從二位に叙されてからということになるうか。また、職分資人ならば、天平二年十月の大納言に任官したときからと考えたい。あるいは、帶刀資人ならば、養老五年三月の帶刀資人四人の中のひとりとして考えたい。つまり、位分資人ならば七カ月間、職分資人ならば十カ月間、帶刀資人ならば十一年五カ月間ということになるが、明確にはしない。

ところで、旅人の父親は安麻呂であるが、母親は不明となっている。しかし、旅人の弟の田主の母が巨勢郎女であり、旅人は田人とも

考えられるから田主とは同母兄弟と推定できる。とすると、母親は近江敗軍の將巨勢朝臣比等の女巨勢郎女ということになるう。そして、旅人晩年の作品、

三年辛未、大納言大伴卿、寧樂の家に在りて故郷を思ふ歌二首
しましくも行きて見てしか神名火の淵は浅みて瀬にかなるらむ

(卷六、九六九)

指進の栗栖の小野の萩の花ちらむ時にし行きて手向けむ

(卷六、九七〇)

の中の「栗栖の小野」とは、旅人の幼少の故郷であり、母の里のことであろう。和名抄・大和志料・大日本地名辞書の比定する大和国南葛城郡忍海村柳原の地であろう。ここでの、近江敗軍の將で配流の憂き目に会った巨勢朝臣の娘を母とする旅人の若き時代と生活を想像しておくことは必要なことだと思われる。旅人の「卷六、九七〇」に答えたものらしい余明軍の歌が、

かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

(卷三、四五五)

である。詳しくは後考に俟ちたい。

(二) 大伴家持との関係

「卷四、五七九・五八〇」の二首は題詞に「余明軍、大伴宿禰家持に与ふる歌二首」とあることからみて、主人の子息への贈歌であることがわかるが、いま一首「卷三、三九四」もまた家持に贈ったものであることは譬喩歌の特徴である「住吉の浜の小松」が、大伴の高師の浜の小松を指して暗に旧主旅人卿の遺児である少年家持を歌いこめていることから明らかである。

後年の家持はこれら余明軍の作品を手本にした歌をいくつか作って

いるのである。それを例示しておこう。

かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

(巻三、四五五、明軍)

かくのみにありけるものを妹も吾も千歳のごとくたのみたりける

(巻三、四七〇、家持)

遠長く仕へむものと思へりし君いまさねば心神もなし

(巻三、四五七、明軍)

家離りいます吾妹を停めかね山隠しつれ情神もなし

(巻三、四七一、家持)

出で立たむ力をなみともりゐて君に恋ふるに心神もなし

(巻十七、三九七二家持)

妹を見ず越の国べに年経ればわが情神の和ぐる日もなし

(巻十九四一七三家持)

見まつりていまだ時だに更らねば年月のごとおもほゆる君

(巻四五七九明軍)

相見ては幾日も経ぬをこたくも狂ひに狂ひおもほゆるかも

(巻四七五一、家持)

あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まくほしき君かも

(巻四、五八〇、明軍)

さく花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり

(巻二十、四四八四、家持)

のように余明軍作歌八首中の半数の四首までが、家持に類想類語句の歌を作らせていることを知ることができる。詳細な点検は別の機会に譲るとして、とにかくここに明軍が家持に与えた文学的影響の痕跡を

指摘することはできるのである。

五、おわりに

以上、資料の羅列、素描に終始したがそれでも多少ともは余明軍なる人物について明らかにされたであろうことは次の諸点である。

- 1、余明軍は、「ヨノミヨウグン」であること。
 - 2、百済系の帰化人であること。
 - 3、余明軍とは兄弟であること。
 - 4、天平初年に大伴旅人の資人であったこと。
 - 5、旅人・家持との文学的交流があったこと。
- 大方のご教示ご叱正をいただき、あらためて考え直してみたい。